

機微ある係わり合いこそ、コミュニケーションの本質

ある大学での月一回の「係わり合いを考える実践検討会（別称：機微の会）」の自主ゼミに参加した。今回の話題提供は、この自主ゼミを主宰する先生であった。

「強度行動障害判定基準（10点以上で強度行動障害、20点以上で特別処遇に該当）」では31点と判定され、「強度の他害行為」、「激しい器物破損」、「パニックへの対応が困難」等々があることから、施設で施設個室で生活させられていた子どもとの概ね月1回の6年間にわたる係わり合いから、今では先生とスーパーへ一緒に出かけるまでに行動調整ができるようになった事例の話題提供であった（係わり合いは、現在も継続中のよう）。

何よりも、今は先生との係わり合いに時々見せる笑顔が、先生の係わり方が子どもに受け入れられてきたことを物語っている。

問題行動と決めつけずに、「行動には、全て意味がある」との原理・原則の基、子どもの行動を読み取ろうと係わり合い方を検証・工夫し続ける先生の相互交渉（コミュニケーション）の実践力には、「驚嘆」以外の言葉の表現がない！

強度行動障害児と判定されていた子どもの行動調整変容の様子をビデオで目にする、
「問題行動がある」と軽々しく決めつけることは許されない気がした。

もし、この子どもが先生に出会わなかったとしたら、あの周りから隔離のままの生活が続いたのかと思うと背筋が寒くなる。

要は、係わり手の思慮・工夫が足りないということ。

「子どもの行動を読み取ろう」、つまり「相手の表面だけでは知ることのできない、微妙なおもむきや事情を読み取ろう」とすることから、この会を「機微の会」と別称する先生の意図・願いが読み取れる。

また、学んだ知識やスキルだけでは係わり合うその場、その空間で、しかも相手のあることだけに適切な相互交渉が出来るとは限らないだけに、常に自らの係わり方を検証し工夫し直し続けることが必要で、それ故、毎回話題提供者自身の係わり合いの実践ビデオを見ながら検証・検討するこの会を、「係わり合いを考える実践検討会」と呼称する先生の意図・願いも読み取れる。

実際に人と相互交渉する空間ではマニュアルもなければゴールもなく、相手の圧にならないように寄り添い続け、相手の発信をしっかりと受け止めて受信したことをどう伝えるか、その工夫の大事さを改めて再認識させられる実践の話題提供であった